

# 映画はスポーツだ！新聞

## BumBの映画塾（全18回）のシナリオ作りから上映会までの流れ

### ① シナリオ（脚本）を書く



最短でも4〜5日間はシナリオ会議。みんなが書いてきた作文から映画をつくるためのシナリオに仕上げる。話し合いのポイントは、起承転結は？ リアリティは？ 言いたい事はなに？ 反対するんだったら代替案を出すこと。脚本家として残った人は何回も書き直し、できあがったところで映画の撮影準備へと進む。

### ② 機材・機材の取扱い講習



カメラ、三脚、照明、レフ板、マイク、フーム、カチンコ、などなどたくさん機材が揃いました。みんながプロ使用の本物です。

### ③ 撮影は合宿を交えての7日間



ロケ地はBumB、夢の島公園、東調布中学校など

### ④ 新宿の東京都庁での上映会



映画塾の下キムメンタリーや3作品の上映のほか、会場全体でのディスカッションもありました。

### 「佐藤監督の想いは」



「2011年の映画塾」  
指導監督 佐藤 武光  
日本映画監督協会会員、  
映画監督、翔ばたくシネマ団代表

今年の映画塾は、不安から始まった。東日本大震災は、僕の故郷、双葉町浪江町に、襲いかかった。宮城、岩手の震災は、もとより、三月十二日から福島県双葉郡から、人が消えたのである。いわゆる、福島第一原子力発電所の爆発である。日本中を震撼させたこの事故は、いくら数百キロ離れている東京とはいえ、映画塾の開催さえ、危ぶまれた。

しかし、僕自身は、何故かカメラを担いで、双葉、浪江町に、なぜか、故郷に走り出していた。悲惨な線路や、陥没した道路は、目をそむけたくなるほどだった。五感に感じない見えない恐怖があるのもわかりつつ、しかし、きれいな田園風景が、変わらぬままにあるのも事実だった。

今年、映画学校の学生が十人、高校生（映画塾のOB、OG）が八人サポートスタッフとして参加していた。こんなに学生が集まったのも珍しいおのずと、彼らが効果的に参加してもらう方法も、生まれてきた。

映画学校生にしっかりと責任を持たせ、学生指導者としての自覚を持ってもらう方法だ。このことが中学生に、映画に親近感を持たせ、映画学校生を貴い存在として中学生と対等に話せる状況を生み出す結果になった。このことが、今回の映画塾の最大の特徴といえる。

映画学校生に、必死で食ってかかる中学生、学生も論破しようとする試みる。また、撮影現場が緊張感を取り始めると、高校生が怒鳴りだす、数年前に、言われたことをそっくりそのままに。指導監督は、我慢して見守る自分たちで解決策を見つけて出そうとして、ぎくしゃくした時が流れ、中学生の中から、「よし、やりなせう！」の音が聞こえ、撮影が再開された。

クラックアップの後、編集に入った。第一回目のラッシュ（試写）の日が来た。中学生は、自分の監督したところや、撮影したところを見て、大喜びだったが、僕は遠慮せず映画の感想を本音で言わせてもらった。そしてこう付け加えた、「僕の言うことは一つの意見であり、最終決定権は、中学生にあります。ただ、発表会で皆さんのご両親はもとより、知らない人もたくさん見に来てくれることを忘れないでください。」と、彼らはただ僕の話聞いてはいたが、明らかに、反発しているのがわかった。しかし、僕の意見に、納得していないが、納得せざるを得ない様子も見て取れた。しばらくすると、3班とも、ときはぎ行動し始めた。もう編集の時間なんか、残されていないのに、そして映画塾の既定の日程は、終了した。

僕自身、出上がりに少々の不安を感じて、上映会に臨んだ。映画塾の下キムメンタリーが終り、各作品の発表に移っていった。全ての発表が終わると、「エース」と、驚いている自分がいた。わずかではあるが、変わっていたのだ。素晴らしい出来上がっていたのだ。そして中学生に聞いた、「おい、どうしたの、撮りなおしたの？」中学生は、笑っているだけだった。真相は、未だ、僕は知らない。ただ、残されたわずかの時間の中で、必死の抵抗を試みて納得できた部分だけ僕の意見を、取り入れてくれたことだけは事実である、改めて映画の持つ不思議な「力」を感じた次第である。

### 「OB・OGが言っている」

「この映画塾ってどうなの？」

『思い出すたび』 小池 茅（2007参加）

「思い出すには二種ある。思い出すたびに色あせていってしまうものと、思い出すたびにその色濃さを増していくもの。僕にとっ、映画塾は間違いなく後者だ。

世の中の大人が言うことには、「私を信じろ。私に刃向かうな」。しかしそこには「私を疑え。私に刃向かえ」と論す妙ちくりんなおっさんがいて、学校では褒められることで怒り出したり、これやっちゃダメかなってことでニコニコしたりするのだから、どうにもやりづらい。しかも、それでいて、根気、体力、行動力、よく考えることの大切さ、同胞への敬意、表現者は表現し続けることとして表現者が在り続けられない、などといった教訓は四年経った今でも僕の心に度々よみがえって来て、これはもうすっかり東京都教育委員会の「社会教育事業」の一環になっているのだから、いつのまにかまんと相手の策略にはまってしまったことになる、へらほらめ！



『映画塾は中学生にどんな影響を与えたか』  
大島 つむぎ（2008参加）

映画塾は中学生に行動力や発言力などを与えているとおもいます！映画は1人の意見ではなく、たくさん人の意見から出来てきます。そして、夏休みという限られた時間で10分の映画を作るにはやるべきことを把握し1人1人が動き出すことが大切なのです！たかが10分などと思わないでください！この10分の映画は自分が成長した証です！初めはなんにも発言できなかった中学生が最後は自分達で上映会の進行をして、大人スタッフがなにも言わなくても自分からやることを見つけて動き出す！そんな行動力を映画塾は与えています！



『我を張る大切さ』  
木下 倫太郎（2007・8参加）

「これは俺の金（税金）で建てたんだ」撮影許可が下りず公園の管理人に放った佐藤監督の一言です。自分の気持ちをストレートにぶつける大人を初めて見た。我慢して引きさがるのが道理だと思っていた。価値観が崩れました。中1、中2で通った映画塾では我を張る大切さを知りました。今では心に溜まった自分の感情に素直になりました。そして、3月11日、TVの津波の映像を見て、私の感情が震えました。9月14日現地入り。カメラを持って気仙沼へ行きました。半年がたった被災地の現状を伝えたいと思ったからです。

### 今年の参加者アンケートから

「どんな点が家や学校とは違う体験になったか？」

- ・全てにおいて何もかもが違う体験ができた。
- ・先生みたいに口出しをいちいちしないから自分の意見が言えた。
- ・自分の意見が尊重された。
- ・学校だと何もいえないけど映画塾だといろいろ言える！
- ・いつもと違う自分になれる。
- ・本物の監督と話し、本気でぶつかる事。
- ・あまり先輩後輩がないところ。
- ・他校の人とたくさん触れ合えた事。
- ・学校以外の場所で自分から行動すること。
- ・性格も学年も学校も違う中学生と1つの映画を作る事。



2012年・夏も実施決定！！是非ご参加下さい！！